

Cemeteries of the Qijia Culture (1)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/5093

集團墓分析論II

——齊家文化为例として(一)——

倉 林 眞砂斗

一 はじめに

齊家文化の遺跡は、中国黄河上流域の甘肅省、青海省東部に主として分布し、とりわけ渭河上流域や、洮河、大夏河流域などに多くみられる。いくつかの遺跡で、銅の純度が高い紅銅や青銅の製品が出土しており、新石器時代から青銅器時代の過渡期に位置づけられる。現在得られている、放射性炭素による年代測定結果からは、紀元前二千年前後に齊家文化の一点が当てられる確度は高い。時期的にはほぼ並行すると考えられる、各地域における諸文化に関する考古学的研究の成果は、女性に対する男性の優位性や、集團内に不均衝が生じていたことを示唆しており、大きな社会変化が生じつつあったことが推測できる。従って、齊家文化の研究を進めて行く上で、農耕を基盤とする生産活動の一定度の発展の後に、どのような社会変化が生じ、その変化が新石器時代から青銅器時代という大きな時代区分の中で、いかに位置づけることができるのか、という重要な問題が横たわっていることを念頭におく必要がある。

このような問題は、一文化内にとどまらず、他地域において展開した諸文化との相互関連を明らかにしていくとい

う、大きな視野の中で取り上げなければならないことは言うまでもない。そして、さらに以後の展開も念頭におく必要がある。齊家文化並行段階に、河西走廊には四壩文化が存在しており、以後該地域では相対的に分布域が縮小した、複数の文化が並存したことが明らかにされている。¹ 例えば、甘肅省東部では安国文化、洮河及び大夏河流域では辛店文化、寺窪文化が、河西走廊では沙井文化が、各々いくつかの特色をもって、齊家文化に比べてかなり狭い分布域を形成している。これらの諸文化は、中原の殷周時代に並行すると考えられる青銅器文化で、沙井文化は春秋・戦国時代まで下降するようである。地域分化がみられるようになることは、各文化の特質を示す現象であると同時に、齊家文化そのものの性格とどのような関係があるのか興味深い。

齊家文化の起源に関しては、従来から大きな関心が向けられてきた。前代に位置づけられる馬家窯文化との関わりを評価する程度、また、外的な影響を評価する程度により、いくつかの解釈が呈示されてきた。齊家文化以後の展開をも射程にいった場合、新石器時代から青銅器時代という転換期において、どのようにして固有の文化が形作られ変化していったのか、という問題を考える上で重要な問題を提起しうると考える。とりわけ、ある程度詳細に内容を知りうる遺跡は集団墓地が多いため、定着的な生産活動に基礎をおく集団の具体像や、変化を捉えることが可能である。ある遺跡で認識できた現象や変化は、普遍性を検証しながら、文化全体像の一部として位置づけられなければならない。また同時に、墓制を構成する諸要素の個別的な傾向が、大きく捉えた文化変化と対応関係があるのか、あるとすればどのような関係なのか、という集団墓地分析の観点からも言及されなければならない。さらに、諸要素における遺跡間の差異が、系統上の相違に関連するの否か、あるいは受けた影響の強弱に関連するの否か、という視点も、土器に認められる類似性を強調する立場とは別方向から、起源に関わる重要な提言を行える可能性をもつと考える。

そのためには、墓域²で認められる諸要素の、全体的傾向をまず明らかにする必要がある。分析可能な資料は極めて限られているが、拙稿²の中で、馬家窯文化の対照例として呈示しておいた、齊家文化の全体的な諸要素の傾向を、考

察を進めていく上での前提として最初に確認しておくことにする。

拙稿では、諸要素を〈埋葬施設〉・〈埋葬方法〉・〈頭位方向〉・〈副葬土器量〉の四項目にまとめ、主として皇娘娘台、大何庄、秦魏家、柳湾の各遺跡での状況を明らかにした。まず、〈埋葬施設〉に関しては、主な四遺跡のうち柳湾遺跡を除く各遺跡と、総寨遺跡や陽窪湾遺跡では、埋葬具を伴わず、墓坑は隅丸長方形の竪穴土坑が主であった。柳湾遺跡では、馬家窯文化馬廠期にみられた組合せ式の木棺や、横穴状の土洞という墓坑が漸減する傾向が認められ、同時に刳抜き式の木棺（独木棺）が急増し、全期を通じて四割以上の割合を占めていた。従って、柳湾遺跡以外の画一性、柳湾遺跡における齊家文化の特異性と、馬家窯文化からの連続性を認めることができる。このような遺跡間の差異は、齊家文化諸遺跡の並行関係や、文化の本質的定義と関わってくる。

〈埋葬方法〉は、仰身直肢葬が主体的で、基本的には、この傾向が維持される。馬家窯文化（半山・馬廠期）のように、屈肢葬が主体的である遺跡はみられず、仰身直肢葬との組み合わせとして認められることが多い。この場合、男性が仰身直肢葬、女性が側身屈肢葬であることが一般的で、このような二体合葬例は、夫婦合葬墓であると考えられている。また、多くは具体的な状況が不明ではあるものの、湟水流域の柳湾、総寨の両遺跡では二次葬が一定の割合を占めているようで、他の諸遺跡における状況とは異なっている。特に柳湾遺跡では、馬家窯文化馬廠早期から一貫してほぼ同じ割合を占め続けており、〈埋葬施設〉の場合と同様に、本遺跡の特色の一つになっている。

〈頭位方向〉についてみると、馬家窯文化（半山・馬廠期）では、柳湾遺跡以外は東から南の間にほぼ納まるのに対し、齊家文化では、やはり柳湾遺跡を除いて、西あるいは西北方向に非常に強い画一性がみられる。つまり、文化を異にして、頭位方向は全く正反対になっている。柳湾遺跡では、馬家窯文化（半山・馬廠期）から齊家文化を通じて北頭位が主体的であるが、画一的というよりは、むしろ地形条件に左右されたと推測できるような、ばらつく傾向が認められる。この点で、柳湾遺跡は、やはり強い特異性を有していると言ってよい。

齊家文化の〈副葬土器量〉は多くはなく、平均は二から三個体で、馬家窯文化の馬廠期に比べると、かなり減少している。柳湾遺跡では、馬廠中期の平均約一九個体をピークとして、以後急激に減少し、齊家文化の晩期段階では平均約二個体となっている。墓坑内から出土する土器以外の品目のうち、馬家窯文化との差異を最も顕著に示す豚の下顎骨は、大何庄、秦魏家、皇娘娘台の各遺跡では多く認められるが、柳湾遺跡では皆無であると言ってよい。

以上のような、四要素における全体的傾向は、各遺跡にみられる少数の例外を除外することによって認識できた。一定の時間と空間を有して展開した文化の具体像は、基本的には普遍性を有し、また、一連の変化が追えるような形で認められる、様々な事象の集合体として得られると考えるが、時として、資料に偏りが見られることがある。齊家文化の場合は、集団墓地に関する資料が多く、各々の遺跡で確認できる構成要素の状況を把握し、一般的傾向を推測することは、比較的容易であった。この全体的傾向は、文化の性格を定義する上で有効に作用することは言うまでもなく、実際、齊家文化の社会を推測するに当たって、墓域で認められたいくつかの現象は、極めて重要な役割を果たしている。一方、資料上の偏りを勘案せずに、極めて概念的に文化を構成する要素を整理した場合、墓制は、あくまで一部門であることも自明である。かつ、全般的な傾向を知るために、各遺跡において多様な状況が捨象されていることを踏まえると、暫定的に得られている文化像を念頭に置きつつ、全体を規定する特徴が、遺跡内でどのような現れ方をしているかを追及して行くことが必要になる。その結果、遺跡間の、即ち齊家文化内部の差異が、如何なる要因に基づいて生じているのか、という問題へと発展させることができる。文化の全体像と、個々の遺跡を対象とした具体的な分析結果とを相互作用させ、より実際の社会を描き出すことを試みることにより、集団墓地分析が提起する問題は何か、という問いかけに対して、改めて分析方法の体系化が必要であることを示すことができると考えている。そして、齊家文化の場合、既存の全体像は、とりわけ起源問題が絡むとき、絶えず不確定な側面を露呈する。このことは、資料上の制約を受けて進められてきた研究の方向と、全く無関係ではないように思える。そこで、各々の

遺跡内部の様相を明らかにして行く前に、これまでの研究の方向と、その成果をまとめておくことにする。これは、齊家文化に対する認識過程の整理でもある。

註

(1) 吳汝祚 一九六一「甘青地区原始文化的概貌及其相互關係」『考古』一九六一—一九二一—一九頁

嚴文明 一九七八「甘肅彩陶的源流」『文物』一九七八—一九〇 六二—七六頁

(2) 倉林眞砂斗 一九八八「集團墓分析論Ⅰ—中国新石器時代馬家窯文化(半山・馬廠期)を例として(一)」『金沢大
学文学部論集 史学科篇』八 一〇一—一三三頁

また、渡辺芳郎氏は、山東龍山文化の呈子遺跡を分析するにあたり、墓葬の構成要素を、考古資料としての側面に留意して整理している(一九八七「山東龍山文化墓制考—呈子遺跡の検討—」『東アジアの考古と歴史 上 岡崎敬先生退官記念論集』一三七—一五七頁 同朋舎)。さらに、大汶口文化の劉林遺跡を対象として、時期別に諸要素の状況を明らかにし、要素間の関係を検討する方法をとっている(一九八九「劉林遺跡墓制考」『史淵』二二六 一五—六〇頁)。

二 研究史にみる文化認識の過程と問題点

甘肅・青海地区の新石器時代の研究史を、特に本論で取り扱う齊家文化を中心に回顧すると、考古学による文化認識の経過をトレースしようと同時に、従来の研究の問題意識を捉え、今後の研究方向を展望することが可能であるように思われる。研究史の詳細は、日本における先学の業績⁽¹⁾があるので、ここでは、調査活動や具体的資料に基づいて行われた文化認識の過程を可能な限り明らかにし、遺跡内分析のもつ意味を考えていくことにする。

該地区の文化変遷の全体的な枠組み（六期編年）を呈示したのは、J・G・アンダーソンで、その序列は、齐家期↓仰韶期↓馬廠期↓辛店期↓寺窪期↓沙井期、というものであった。^② この序列の中で、齐家文化の位置づけに対して、例えば「河南で仰韶期から龍山期という系譜が辿れ、従って龍山期に類似する土器をもつ齐家期が、仰韶期に先行することはありえない」という、状況証拠に基づく批判が行われるようになる。^③ アンダーソンの業績の根幹は、いまなお有効であるが、齐家文化の位置づけは、「彩色を施されない土器は、施されたものより古い」というア・プリオリに則ってなされており、陽窪湾遺跡^④で齐家期が仰韶期よりも新しいことが判明した結果、修正を迫られた。一九五〇年代後半に集中して行われた甘肅省内の調査の結果、仰韶期↓齐家期という流れは動かし難いものとなり、また、齐家文化は辛店文化に先行するという、今日の共通認識となっている序列が確立された。さらに、次第に蓄積されていった放射性炭素による年代測定のデータは、中国全土の諸文化の体系化に大きな役割を果たし、甘肅・青海地区では、馬家窯文化↓齐家文化↓辛店文化という序列を支持している。測定結果の多くは、馬家窯文化馬廠期や隣接諸文化との関係に対する理解にも少なからざる影響を与え、同時に、齐家文化内の遺跡間の先後関係、即ち「東の齐家文化の年代は西のものより古い」という認識と、無関係ではなくなっている。^⑤

一つの文化としての認識が有効に作用するには、物質文化上の独自性が呈示され、かつ時間的位置づけの妥当性が証明されるだけではなく、固有の分布範囲を有することが明らかにされる必要がある。分布調査の結果、齐家文化の空間的広がりには次第に明らかになり、甘肅省内の諸文化の概要を把握した一九六〇年の段階で、遺跡数は三三五ヶ所を数えている。^⑥ 分布図（図1）^⑦を見ると、涇河、渭河の上流域、洮河・大夏河の流域などに特に集中しており、いわゆる河西走廊では武威地区にみられるだけで、分布は希薄になっている。一九七四年には、甘肅省南端部を南流する白龍江流域における調査の結果、八ヶ所で齐家文化の遺跡が確認されている。^⑧ また、青海省に属する、湟水と大通河に狭まれる地域でも発見されるようになり、中でも一九七四年から調査された柳湾遺跡は、馬家窯文化半山期から継

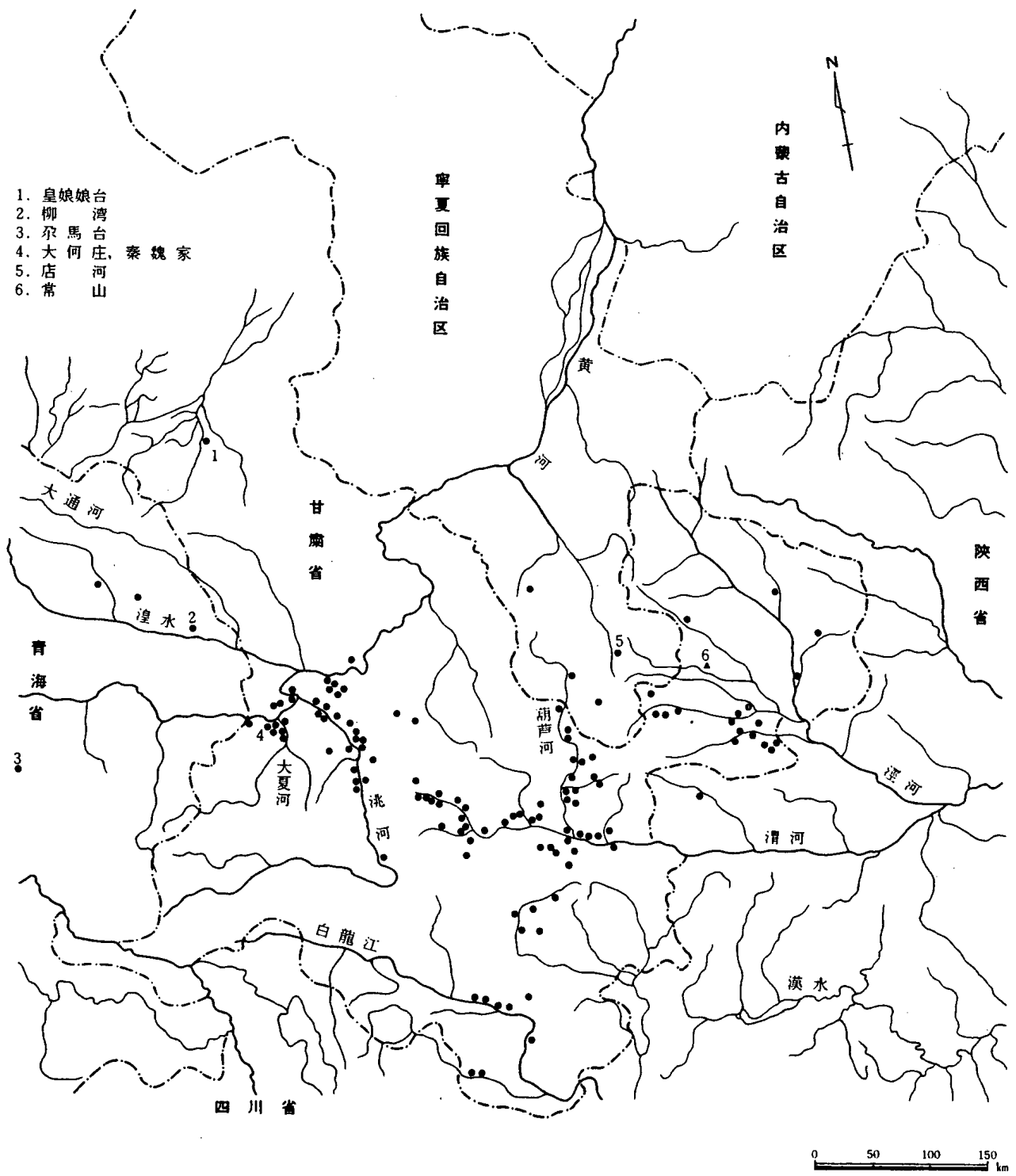


図1 齐家文化の遺跡分布図

統的に営まれた遺跡として著名である。さらに、涇河の上流域と、南流して渭河に注ぐ葫芦河の上流域をつなぐように、寧夏回族自治区の南部域において、齊家文化の範疇に入るとされる遺跡が少数ながら確認されている。

このように、調査件数の増加と共に分布域も拡大したが、渭河上流域と、洮河及び大夏河下流域に分布が集中する傾向は変わらないであろう。齊家文化の生成を考えていくにあたっては、他地域、特に東側ではほぼ並行して展開した、客省庄文化との関係⁹⁾を念頭におくことが一般的である。両者の相互関係を明らかにしていく上で、河川沿いに分布する遺跡群を、水系を単位としてまとめ、比較していくことは重要であるように思われるが、前提となる各遺跡の具体的な報告は非常に少ない。

具体的に内容を知ることができる遺跡の中で、居住域に関する情報を得られる遺跡は更に限られており、住居跡に関しては、個別的に形態・規模・構造などを知ることが多い。一九五八年には、六棟の住居跡が検出された秦安寺嘴坪遺跡が報告され、以後、武威皇娘娘台遺跡や永靖大何庄、姫家川遺跡などで検出されている¹⁰⁾。平面形は方形を基本とする半地下式で、床面は漆喰で固められている（白灰面）¹¹⁾ことが多く、ほぼ中央に円形の炉を伴い、中には直径一メートルに近いものがある。幅数十センチメートルから一メートル前後の、長方形の突出部分は出入口部と推定されており、南東から南西に向く例が多い。報告されている資料の多くは、居住域の部分的な発掘調査で得られたものである。また、調査区域や周辺地形を報告から知ることができない場合があり、住居跡相互の関係を推測しながら、居住域の側から集団関係を具体的に論じていくのは、今後に期するところが大きい。

生業に関しては、石器・骨器の生産具、とりわけ耕起具・収穫具・製粉具と認定できる各種道具の存在から、農耕に基盤を置いていたことは疑いなく、主要作物は粟であったと考えられている。豚の下顎骨が副葬されている例は、大何庄、秦魏家、皇娘娘台の各遺跡で多くみられ、馬家窯文化との主要な差異の一つである。豚の下顎骨が、時には多量に副葬されていることは、家畜として特に豚が重要な位置を占めていたことを示唆しており、副葬量にみられる

較差は、私的所有の程度を反映するものとして理解されている。また、骨鏃の存在からは、ある程度の狩猟も行われていたことが窺える。さらに、馬家窯文化との大きな差異として、銅器制作の開始をあげることができる。斧・鑿・錐・刀子・鏡など、比較的小形のものが発見されており、銅純度が高い紅銅だけではなく、青銅も用いられたようである。

以上のように、居住・生業を含めた全般的な様相は、甘肅省内の調査件数の増加と並行して認識されていったよう¹³で、一九六〇年代の始めには、文化全体像に関して言及されるようになった。特に、墓域にみられた状況から、男性の家庭内での統治権が確立された父系社会で、埋葬の姿勢、副葬品の質・量などにみられる較差から、私的所有の不均衡、社会的地位の格差が生じていたと理解され、このような社会像は、現在に至るまで大きな変更は必要とされていない。また、齊家文化と諸文化との関係に対する見解も示され、齊家文化は馬家窯文化を基礎として発展してきたもので、辛店文化へ展開していくとされた。さらに石陶は、客省庄文化との密接な関係と、渭河上流域における周族文化の形成との関連を想定している。以後、資料の増加はみたものの、一つの方向が示された諸文化間の関係が、具体的に検証され、深化されてきているとは言い難い。いくつかの遺跡で認められる、脈絡から切り離された事象の類似が注目されるにとどまり、それは結局のところ、ある程度遺跡内分析を試みることができるような形で報告された遺跡が、極めて限定されていることに原因している。

遺跡内分析を試みることができる遺跡としては、大何庄、秦魏家、皇娘娘台、柳湾などをあげることができる。前の三遺跡の調査面積は、柳湾遺跡に比べると非常に狭いが、共に集団墓地としての側面を窺い知ることができる例である。大何庄、秦魏家の両遺跡は一九五六年に確認、一九五九、六〇年に発掘調査され、調査成果の概要は一九六〇年に発表された¹⁴。また、皇娘娘台遺跡は、一九五七年に確認、同年に第一次発掘調査、五九年に第二、三次発掘調査が行われ、やはり一九六〇年に概要が報告されている¹⁵。これら三遺跡の一連の調査から得られた認識が、一九六〇年

代初頭に発表された、石陶や呉汝祚等の齐家文化全体像の大きな基盤になっているものと思われる。一九七〇年代中頃から後半にかけて、これらの遺跡における墓坑の個別データ、墓坑間の位置関係など、遺跡内の状況を具体的に知りうる報告が発表された。⁽¹⁶⁾ 柳湾遺跡はちょうどその頃、即ち一九七四年から七八年にかけて調査され、一九八四年に本報告が刊行されている。⁽¹⁷⁾ これらの遺跡は、後で、遺跡内分析の具体例として取り上げることにする。

一九七九年には、中国考古学研究所の三〇年を振り返った総括が各省・区ごとに発表され、齐家文化は甘肅省、青海省、寧夏回族自治区の項で取り上げられた。ここで述べられている文化像は、以前と大きく異なるものではないが、資料の増加を反映して、新たな認識が得られている。甘肅省博物館による総括の中で興味深いのは、「火烧溝類型の文化」に関する叙述で、位置づけに配慮して一項として取り上げられている。⁽¹⁸⁾ この文化は、主として西部域で展開し、分布域に齐家文化は認められず、しかし、受けた影響は非常に大きいと考えられた。一九七六年に、発掘調査された火烧溝遺跡（玉門市）の集団墓地では、銅製品を伴う墓が一〇〇基以上あり、先にあげた齐家文化の諸遺跡に比べて、副葬率が非常に高い。また、伴出した動物骨は羊骨が多いようで、豚の下顎骨が一般的な齐家文化とは異なっている。さらに、仰身直肢で単独埋葬を主とする点では類似し、一方、頭位方向は東で、西及び西北を主とする齐家文化とは異なる。土器は「四壩式」に酷似しているという。従って、四壩文化の具体的内容が明らかになれたと言いうるのであろうか。

放射性炭素による年代測定（年輪年代法による修正値）では、紀元前一六〇〇年を下ることはなく、大体夏代に相当し、齐家文化の後半段階に重複すると考えられている。貧富の差が顕著で、「早期奴隸社会」に入っていると理解される社会状態は、一般的に想定されている齐家文化の社会と同様である。火烧溝類型に含められる遺跡が、具体的にどのように分布しているか不明であるが、火烧溝遺跡は齐家文化の分布域を大きく外れており、時期的にも、空間的にも、齐家文化の影響をうけて、青銅器制作技術を発達させた文化の一形態として理解してよいように思われる。こ

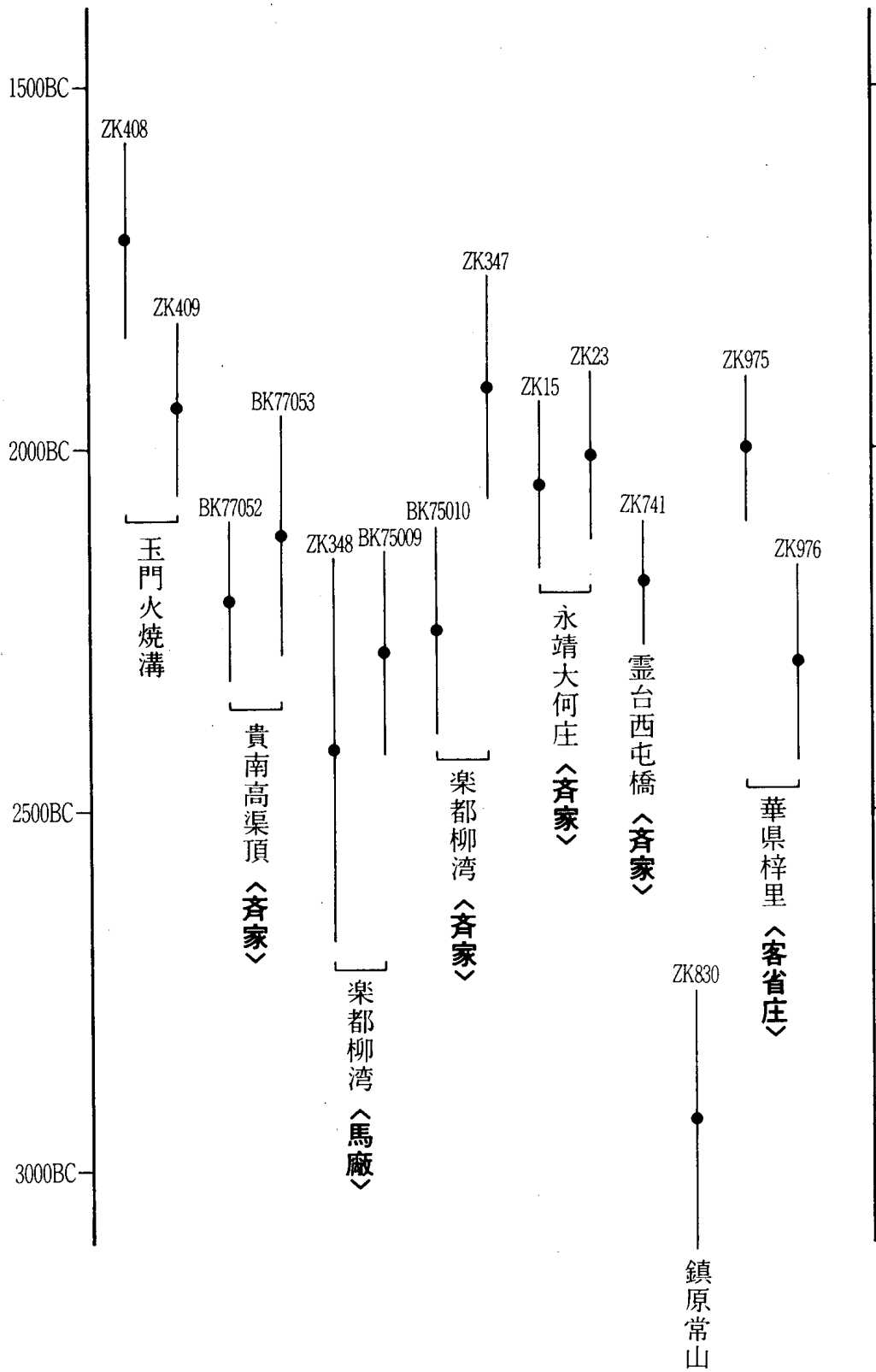


図2 放射性炭素による年代測定値の代表例

の場合の齐家文化は、様々な差異を内包しながらも、総体的に一つの文化として取り扱うことができる。

『文物考古工作二〇年』の中の青海省の項では、青銅鏡が出土した及馬台遺跡が紹介されている。¹⁹この遺跡は一九七七年に発掘調査された結果、配列が整った四〇余基の集団墓地の様相が明らかにされ、八割近くが、他にほとんど例がない俯身葬であった。このことは、本遺跡が齐家文化の分布域の西限に位置する点を考慮すると興味深い。

寧夏回族自治区の項では、南部域に多くみられる齐家文化の概況がまとめられており、甘肅省の齐家文化との差異が窺える。²⁰仰身直肢葬のほかに、側身屈肢葬も多くみられ、豚の下顎骨を副葬する例は発見されていないようである。また、甘肅省で特徴的な、長頸で肩部の屈曲が明瞭な罐や、敲打器は極めて少なく、少数見られる彩陶は皇娘娘台遺跡のものとは異なり、半山期の彩陶との共通点が多いとされている。このことは、後に触れるが、齐家文化の定義や生成過程の解明に深く関わると思われる。

一九七〇年代の終わりから、八〇年代の中頃にかけて、齐家文化に関する謝端琚の一連の論考が発表された。²¹これらの中には、特定の遺跡の分期、墓葬などに関して個別的に扱ったものがあり、これまで文化全体として言及されてきた問題に対して、細かな視点から検討が行われている。このような研究は、既に文化全体の大枠が組立てられ、起源に関してある程度の見通しがつけられている現在、積極的に押し進めるべきである。謝端琚は齐家文化の分布域を大きく三区域（甘肅東部地区／甘肅中部地区／甘肅西部・青海東部地区）にわけ、各地区の代表的な遺跡（七里墩・寺嘴坪／大何庄・秦魏家／皇娘娘台）の様相を比較し、東に位置する遺跡が西に位置する遺跡より古いという、「東早西遅」の見解を明確にし、さらに大何庄遺跡を早期段階、秦魏家遺跡を晚期段階とした。²²翌年には両遺跡の土器群の検討を行い、各々を二期に細分し、先後関係を確認している。²³「東早西遅」の捉え方と、文化内部での発展過程を示していると考えた、大何庄から秦魏家へと変遷は、一九七六年にも謝居が指摘して²⁴おり、遺跡間の差異を、生成過程と関連づけて理解する枠組みは整いつつあった。つまり、遺跡間の差異は、同一文化系統の、異なる発展段階を

示しているという見解である。

また、謝端琚は、齊家文化と客省庄文化の土器の、類似点と相違点を述べている。⁽²⁵⁾ 類似した器種が見られる一方で、齊家文化の土器は橙黄色、紅褐色を呈し、平底が主体的であるのに対し、客省庄文化では、鬲・罍などの三足器が主体的で、紅褐色陶がみられるものの灰陶がほとんどである(図3)。⁽²⁶⁾ 従って、主要分布域が隣接していることから、交流の結果の相互影響を反映しつつも、同一の文化系統に属するものではないと考えている。この相互影響や、生成に関わる「東早西遅」の様相をさらに具体的に明らかにしていくためには、客省庄文化分布域の隣接地域である、甘肅省東部地域の遺跡に注目しなければならぬが、現段階の資料不足は否めない。

やはり墓葬の分析を行った吳汝祚は、東部域を除いて、甘肅省洮河、大夏河地区(秦魏家類型)、河西走廊及び付近一帯地区(皇娘娘台類型)、青海省河湟地区(柳湾類型)に分けている。⁽²⁷⁾ 謝端琚が、秦魏家遺跡と大何庄遺跡の土器の分析を行い、大何庄↓秦魏家という変遷を示したの⁽²⁸⁾ に対し、器種構成に主眼を置きながら、秦魏家遺跡を三期に分け、大何庄遺跡はその第二、三期に該当するとした。従来の一般的見解が、遺跡間の差異を発展の方向として捉え、時期差に結びつけていたのに対し、時期的に同じでも社会性質が異なることがあるのは、必ずしも均等に進行しない社会発展の必然的結果である、という観点を示している。つまり、社会発展の高低から時代の早晩を決めることはできないとし、新しく位置づけられることが多かった皇娘娘台遺跡は、土器の比較検討に基づいて、秦魏家遺跡に並行する早期の遺存であるとしている。

齊家文化の社会像に大きく関わる、墓域における特徴的な状況、例えば、成人男女合葬墓、副葬品の多量例、特殊な埋葬例⁽²⁹⁾などは、各遺跡において、具体的に取り上げられることはほとんどなかった。他の文化と分かち、ある程度普遍的であると認めうる現象が、各遺跡において如何なる脈絡で認められるのか、という観点から分析していくことは、多様な変化に対して目を向ける余地を残し、文化を流動的な側面から考察していく上で欠くことができないと考

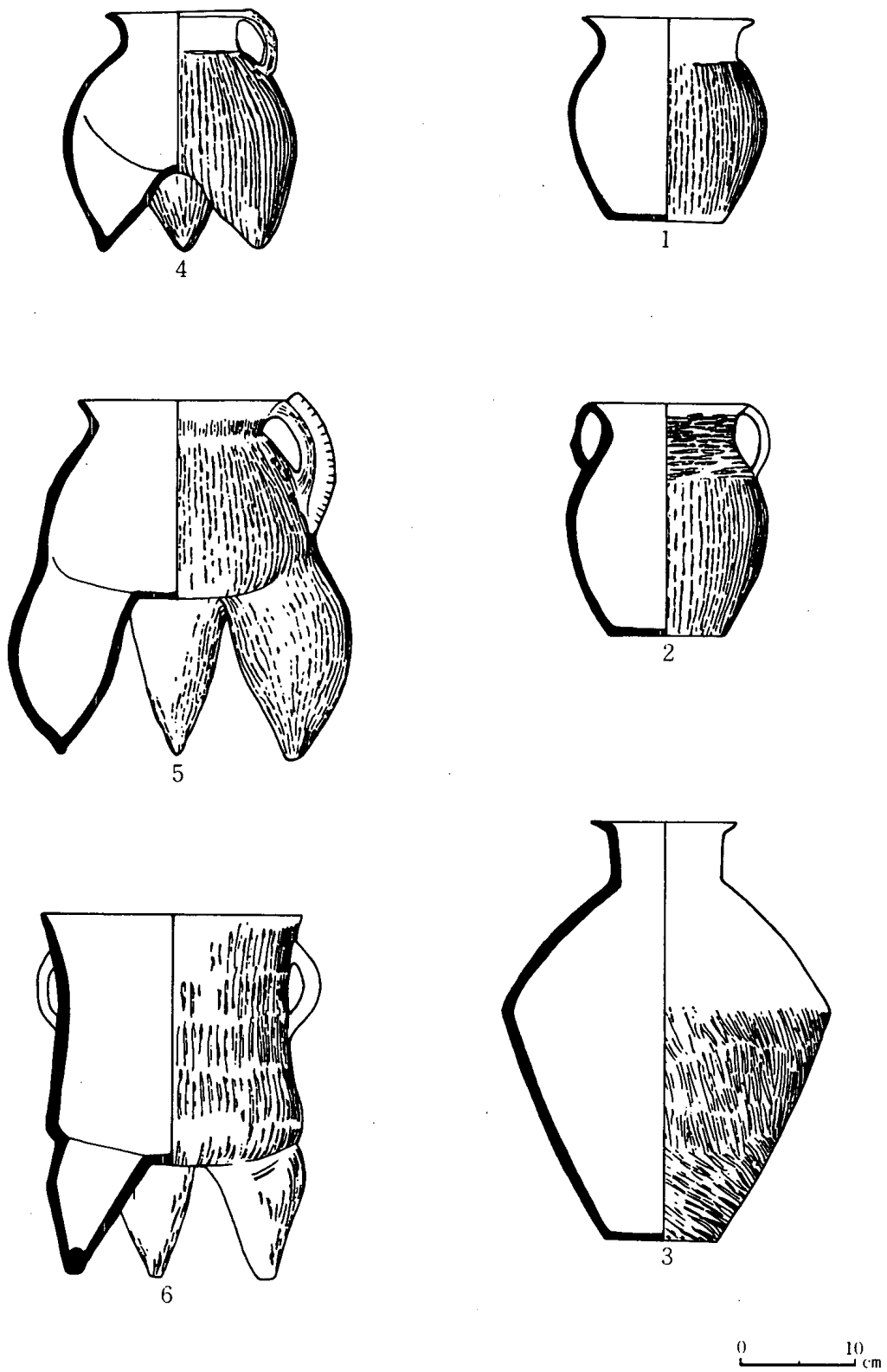


図3 客省庄文化の土器群

える。そして、従来描かれてきた全体像を検証することができ、また深化させていくことができる。

従って、近年、張忠培が具体的な状況を知りうる、皇娘娘台、大何庄、秦魏家の各遺跡を対象として、遺跡内分析を試みたことは、これまでの研究の流れを振り返れば、必然的に向かうべき方向であり、本論の目的もそこにある。張忠培の論考は、各遺跡ごとの分期から始まり、齊家文化を大きく三期に、さらに各々を三・二・三(段)に細分した。集団墓地内の分析にとどまらず、起源・社会にまで言及しており、総論として評価される。しかし、同じ資料を基礎としていても、筆者の捉え方と異なる点もあり、詳細は、次章で照応させながら明らかにしていきたい。また、既に批判が発表されている。³¹⁾ 陳暹は、張忠培による各遺跡ごとの分期を検証し、設定された各段の特性が明確ではない点、少ない資料に基づいて段の設定が行われている点、などを指摘し、さらに遺跡間の時期的な関係に問題があるとしている。

齊家文化の起源に関して、または、齊家文化に対する理解の仕方に対して、新しく報告された資料を取り上げて、言及しておきたい問題点がある。一九六五年に寧夏回族自治区の固原店河で、六基の齊家文化の墓葬が発見され、そのうちの三基に関しては具体的に内容を知りうる。³²⁾ 各々の被葬者は、三体とも左を下にした側身屈肢葬で埋葬され、頭位方向は南西である。一号墓は、全長二・八メートル、幅一・四五メートルと、幅広の墓坑で、副葬土器は三六点多い。これらの点で、大何庄、秦魏家遺跡などでみられる例とは極めて異なり、報告では半山類型の要素を含む、とされている。二号墓から出土した一点の彩陶は、半山期の土器そのものである(図四一)。³³⁾ これ以外の土器は、繩文、籃文が認められる紅陶であるため、齊家文化の一類型として理解されたのであろう。これらの土器群は副葬土器であり、一括性は疑う余地がない。また、馬家窯文化の半山期から馬廠期への変遷も明確である。一九七九年の総括で述べられていた半山期の彩陶との類似性が、寧夏回族自治区南部域において一般的であるならば、この区域が齊家文化の主要分布域では東部に該当し、かつ涇河上流域と葫芦河上流域をつなぐ部分にあたっていることからして、生

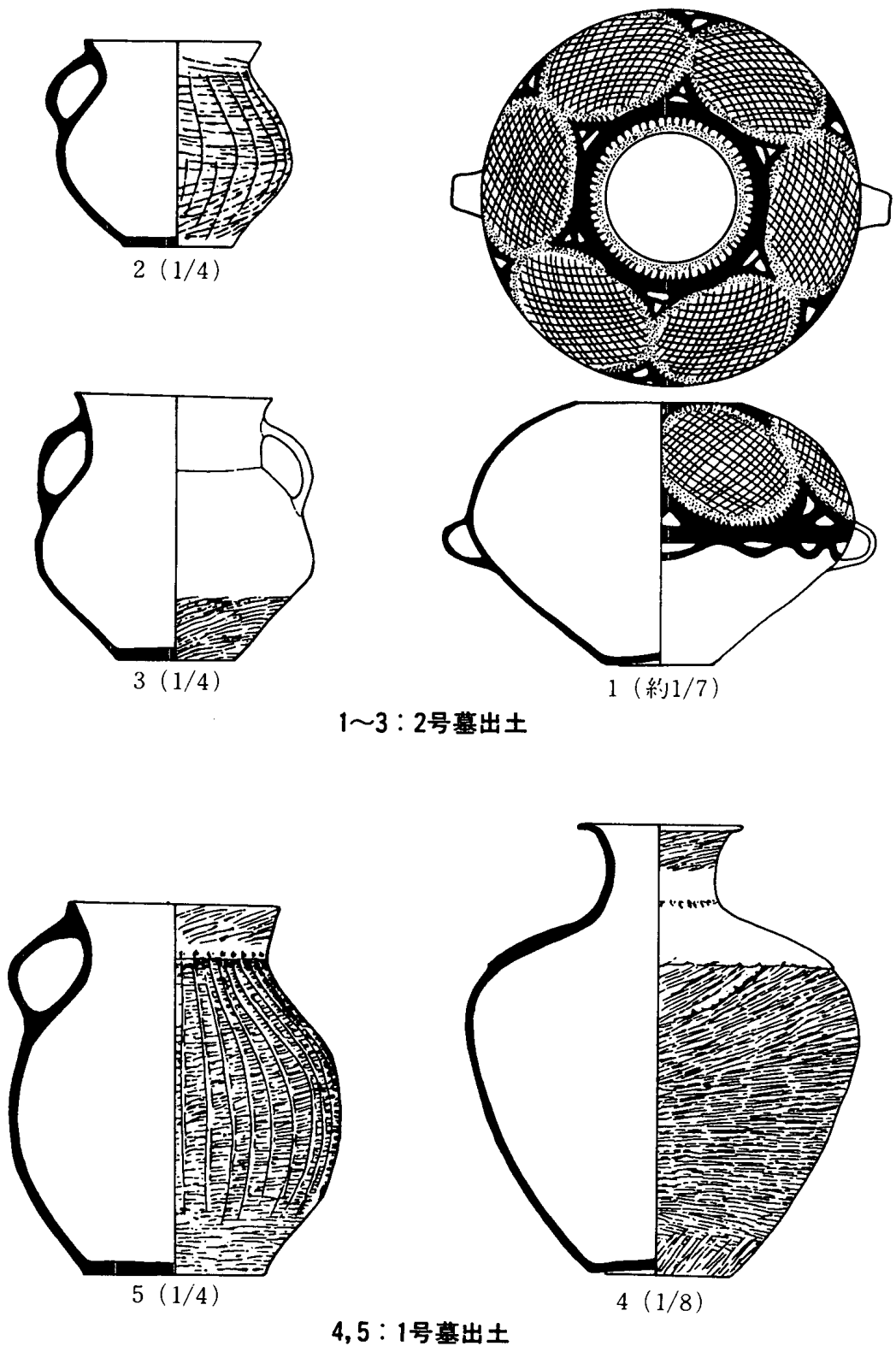


図4 固原店河遺跡出土の副葬土器

成に関する重大な問題が内包されていると考える。即ち、半山類型の要素を含む分、甘粛・青海省の齐家文化よりも年代的に先行するものとして理解した場合、後に主要分布域となる甘粛・青海省東部が馬家窯文化半山期の段階で、齐家文化が成立していたことになり、該区域での文化としての独自性が明らかにされる必要がある。資料上の制約を鑑みて、甘粛・青海省における馬家窯文化（半山期↓馬廠期）↓齐家文化という文化序列を重視したとしても、固原店河のような例に基づいて、「東早西遅」の認識が対象域を拡大しつつ、益々確たるものになっていく、との予測が立つ。しかしながら、この区域内の諸遺跡の様相を、既存の文化の枠組内で説明するだけでは、生成に関する問題の深化は望めないであろう。

胡謙盈は一九八〇年に、起源に関する独自の見解を発表した³⁵。齐家文化を二タイプに分け、甲タイプ（大何庄、秦魏家）は乙タイプ（皇娘娘台、柳湾）より古く、従って、乙タイプに馬廠期の特色が認められることをもって、その発展上に齐家文化を位置づけることはできず、また、客省庄文化も同質の文化とみることとはできないとした。甘粛省東部、鎮原県常山遺跡で認めた、常山下層文化が発展したものが齐家文化であると考え、調査例が少ないことや、起元前二九三〇±一八〇年という年代（年輪年代法による校正数値）が、大何庄遺跡で得られた数値と、約八〇〇年の開きがある点を留意しながらも、類似点を強調している。翌年の常山遺跡の概報の中でも、類似点を指摘して密接な関係を強調しつつ、相違点をも明らかにし、文化としての独自性を主張している³⁶。

胡謙盈は、これまで一般的に齐家文化とされてきたものを分離することによって、起源に関わる問題を明確にしようとしたと考えられる。確かに、甘粛省中部地区での大何庄、秦魏家遺跡以前の様相、及び、東部地区の具体的状況が不鮮明である以上、「東早西遅」の考えに基づきつつ、起源を解明していくことが行詰まることは明らかであった。しかし、資料不足から、常山下層文化を一つの文化として捉えるには全体の枠組みが脆弱であったため、二群（甲・乙）に分けることができる土器群は、甲組は馬家窯文化に近似し、乙組は齐家文化の一地方類型である、というよう

に既存の文化体系の中で捉えうるものであると批判されている。³⁷ 齐家文化の典型例とされている、大何庄、秦魏家遺跡との類似の度合を尺度にすることは、研究のある段階での便宜的手段とはいえても、「東早西遅」の認識を深めていくこととは方向が異なる。寧夏回族自治区南部、甘肅省東部域で、独自性を明らかにしうる資料が調査・公表されることにより、研究が大きく進展することは疑いない。

齐家文化の直接の起源ではない、とされることが多いものの、密接な関係があることが繰り返し指摘されてきた客省庄文化は、一九五一年に西安近郊の開瑞庄（別名客省庄）で確認され、五五年から五七年にかけて発掘調査が行われた。³⁸ 以来蓄積されてきた資料は、齐家文化とは対照的に集団墓地は少なく、住居跡に関するものが多い。客省庄文化の土器を特色づけるのは、三足器、とりわけ鬲と罍で、張忠培は、特に袋状の脚部の変化に注目した形態変遷に基づいて、分期が行える可能性を指摘している。³⁹ 三足器の形態変化は、客省庄文化の中だけの問題ではない。齐家文化の遺跡で散見される三足器の位置づけとも関わり、両文化の関係のみならず、齐家文化の諸遺跡の並行関係を掌握する上での一指標となりうる。張忠培は、採集資料ではあるが、皇娘娘台遺跡の甗を、秦魏家遺跡で発見された三足器の脚部形態変遷過程の間に位置づけており、遺跡間の時間的な関係を、より実証的に検証する必要があることが窺える。また、脚部形態変化の流れからみて、齐家文化は客省庄文化と同時期に成立し、客省庄文化以後も継続した、と推測している点に注意される。

客省庄文化においても、関中東部・西部、陝北、陝南地域での地域色が指摘され、いくつかの類型が設定されている（図5）⁴⁰。関中西部域にみられる双庵類型は、約八三パーセントが紅陶で、灰陶が少なく一六パーセント程度であるのに対し、東部域の康家類型では、八〇パーセント以上が灰陶である。従って、甘肅省に近い西部域で展開し、紅陶が主体的である双庵類型の実態が、両文化の関係を具体的に解明していく上で、大きな意味をもっている。ちなみに、客省庄文化の放射性炭素による年代測定値は、甘肅省東部の齐家文化の数値に近似している。

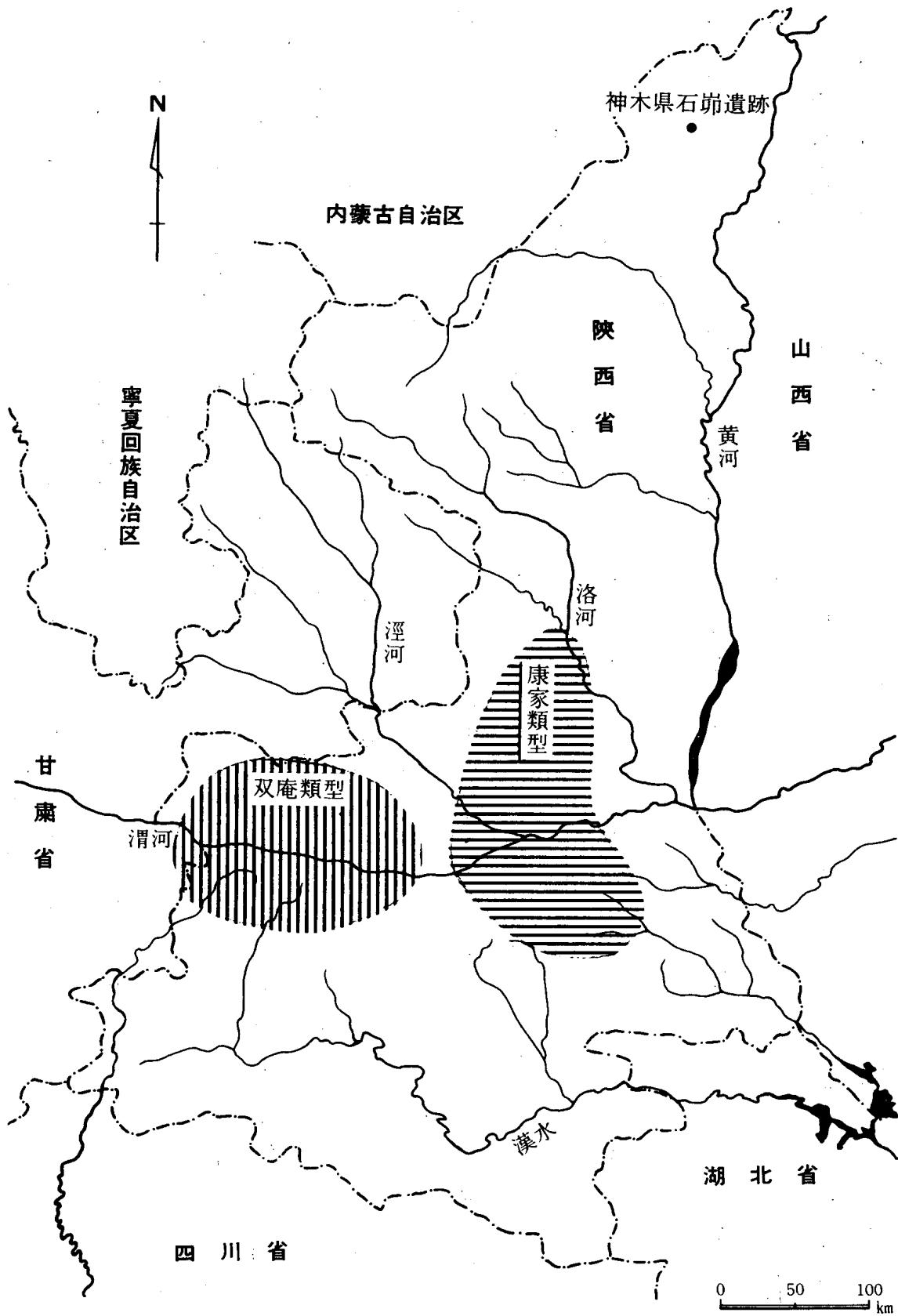


図5 客省庄文化各類型の分布範囲

一方、齊家文化は土着の文化を基礎とし、発展過程において、客省庄文化よりも寧ろ、晋南龍山文化（山西省汾水流域）の影響を受けたとする見解もある。⁴¹ 王克林は、白灰面住居跡、墓葬様式の一部、土器（鬲）の三要素にみられる共通性を強調している。該地域と甘肅省東部域の間には、陝西省の北部域が広がっており、晋南龍山文化と齊家文化の関係を論じるには、陝西省北部の洛河や涇河流域の様相がもっと具体的に明らかにされる必要がある。

齊家文化の起源問題とからめて、周辺諸文化との関係を論じるにあたっては、例えば土器においては、個別器種の形態的特徴や器種構成の類似などが、特に重視されている。彩文が用いられない段階の比較基準として、より厳密に形式を統一し、型式変化を把握し、さらに技法などに注目して、各々の様式を設定することが重要な課題である。しかし、現段階で、西部域の馬家窯文化（馬廠期）、齊家文化、客省庄文化（特に双庵類型）を包括するような形での土器様式の体系化は、直ちには行い難い。従って、極めて暫定的ではあるが、次章で、遺跡内分析と関連する程度に言及していきたい。ここでは、土器以外の要素、特に住居跡と墓葬全体について、齊家文化と、馬家窯文化、客省庄文化、晋南龍山文化、さらに常山下層文化との共通点、相違点をまとめておくことにする。

住居跡は、墓葬と同様に、遺構として確認し易いため、各々の形態・構造上の諸特徴が比較検討されることが多い。齊家文化の住居跡は、先に述べたように、報告されている例は多くはない。代表的なものとして、大何庄遺跡のF2、F7がある。F2は、居住面遺構として報告されているもので、竪穴状の掘り込みを持たず、直径一五センチメートル前後、深さ一三―二〇センチメートルの柱穴一〇が、左右対称に居住面を取り囲んでいる（図6）。⁴² 規模は、四・一五×三・一メートルで、西壁によって、深さ約二・五センチメートル、直径一メートルに近い炉が設けられている。居住面は紅褐色土が堅くしまったもので、白灰面は作られていない。これに対しF7は、白灰面に覆われた、深さ約三〇センチメートルの掘り込みを持ち、南辺中央部は一・二―一・四メートルの幅で約四〇センチメートル突出し、出入口部と考えられている（図7）。⁴³ 突出部より、直径一・二メートルの炉が設けられ、厚さ一四センチメートルの

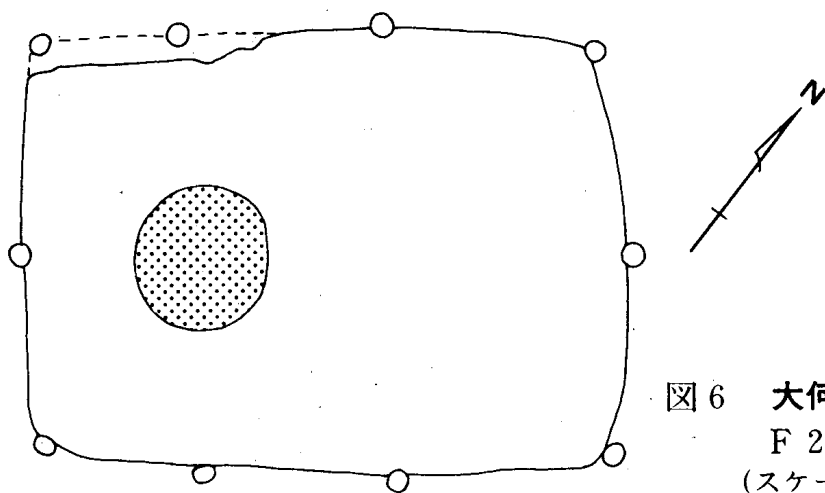


図6 大何庄遺跡
F 2 居住面平面図
(スケールは図7と同じ)

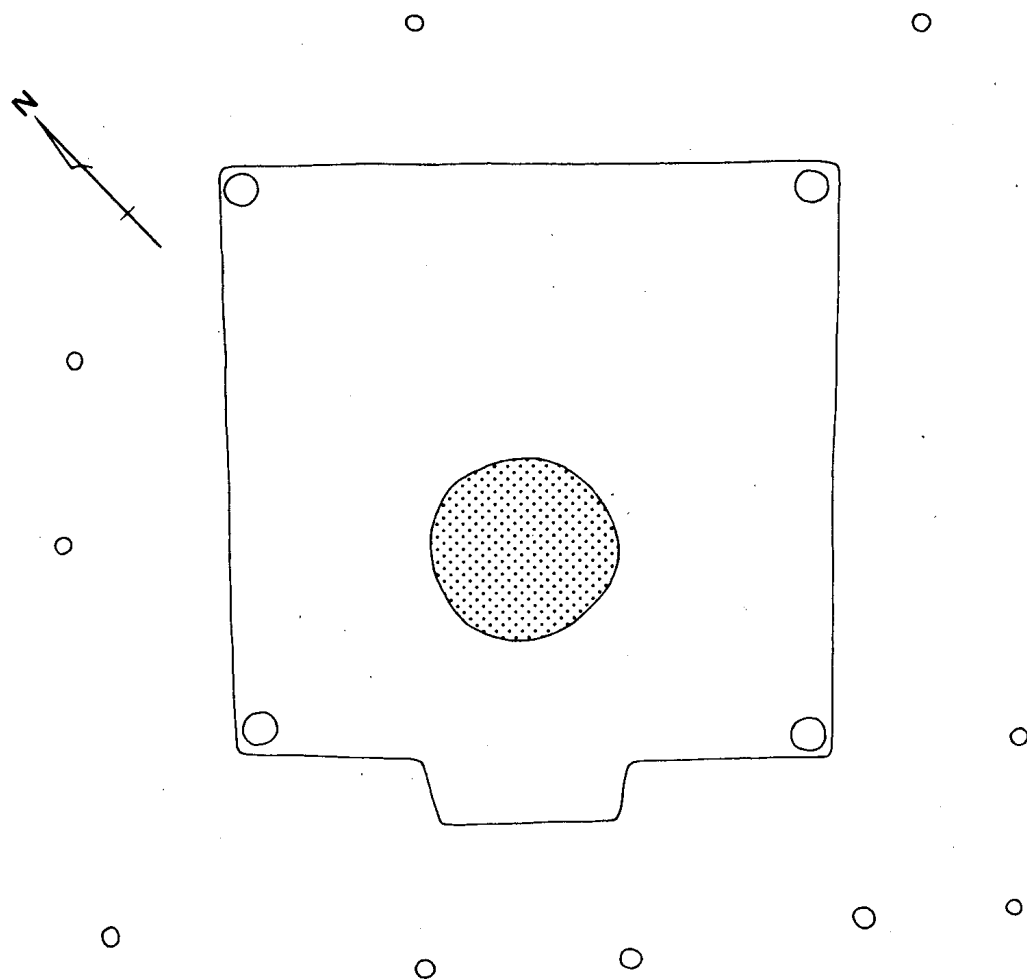
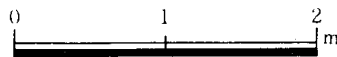


図7 大何庄遺跡 F 7 平面図



焼土層が形成されていた。柱穴の検出状況から、F2とF7の上屋構造は、明らかに異なっている。F2のような居住面遺構は、六ヶ所で確認されたと報告されており、F7タイプが一例であるのに比べて多い。⁽⁴⁴⁾

馬家窯文化（馬廠期）の住居跡は、具体的な状況がわかる馬家湾遺跡での検出例を、前稿でとりあげておいた。⁽⁴⁵⁾ 円形の炉が設けられている点、複数の柱穴が明確に検出できる点、突出部を持つ点、等で齊家文化の住居跡と類似する。一方、突出部を除いたプランが、正方形に近いものだけでなく円形のものが見られる点、方形住居跡の突出部が一方のコーナーによっている点、等で異なる。また、現在の資料からは、白灰面の系譜を馬家窯文化の中に求めることは困難である。

客省庄文化の住居跡には、まず、複室構造であるため特徴的な平面形態を呈するものがある（図8）。⁽⁴⁶⁾ 花楼子遺跡のF2は、東側の部屋（内室）が三・四×一・九二メートル、推定される出入口に近いほうの西側の部屋（外室）が、三・四×一・三メートルを測り、幅七〇センチメートルの通路でつながっている。内室の南壁西半部は三〇センチメートルほど突出し、東半部の壁沿いに、深さ約二〇センチメートルの長方形の土坑が確認されている。通路のすぐ北の西壁際に、直径約六〇センチメートルの円形の炉が設けられている。本例は、南北方向の幅は等しいものの、東西方向の奥行きに差があるため、両室の面積に較差が生じている。一方、客省庄遺跡で検出された一例は、内・外両室ともほぼ正方形に近い形状で、外室の幅・奥行きともに内室に比べて短く、また、双方で焼土の広がりや確認されている。⁽⁴⁷⁾ これら二例の住居跡では柱穴は確認されていないが、より大形の例では、室内に一つの柱穴が検出されることが多い。また、床面は硬化しているが、白灰面は認められないようである。このような複室構造の住居跡は、齊家文化の遺跡では現在のところ報告されていない。

客省庄文化康家類型の標識遺跡である、臨潼県の康家遺跡では、四二基の住居跡が検出されている。⁽⁴⁸⁾ 極めて特徴的なのは、二、三棟、多い場合は五、六棟が、二四〜八〇センチメートルの間隔をあけて、辺を揃え、かつ、突出部を

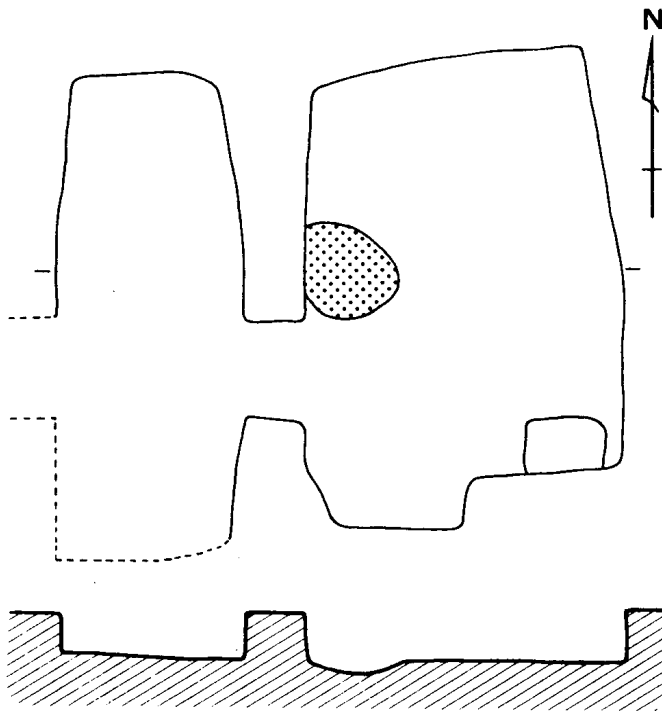


图8 花楼子遗址
F 2 平面图·断面图
(约1/70)

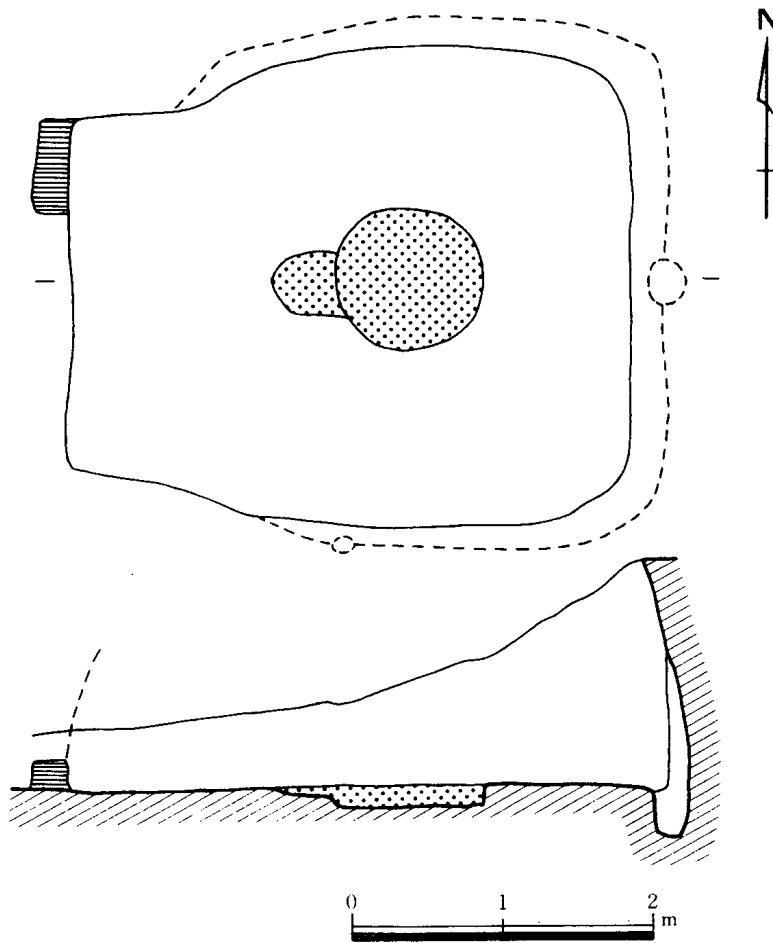


图9 赵家来遗址 F10平面图·断面图

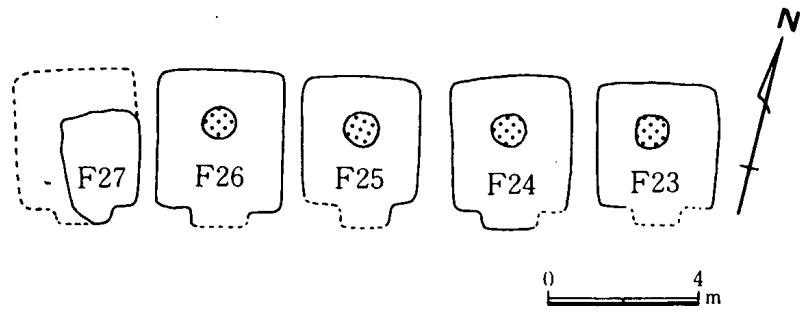


图10 康家遗址 F23~27平面图

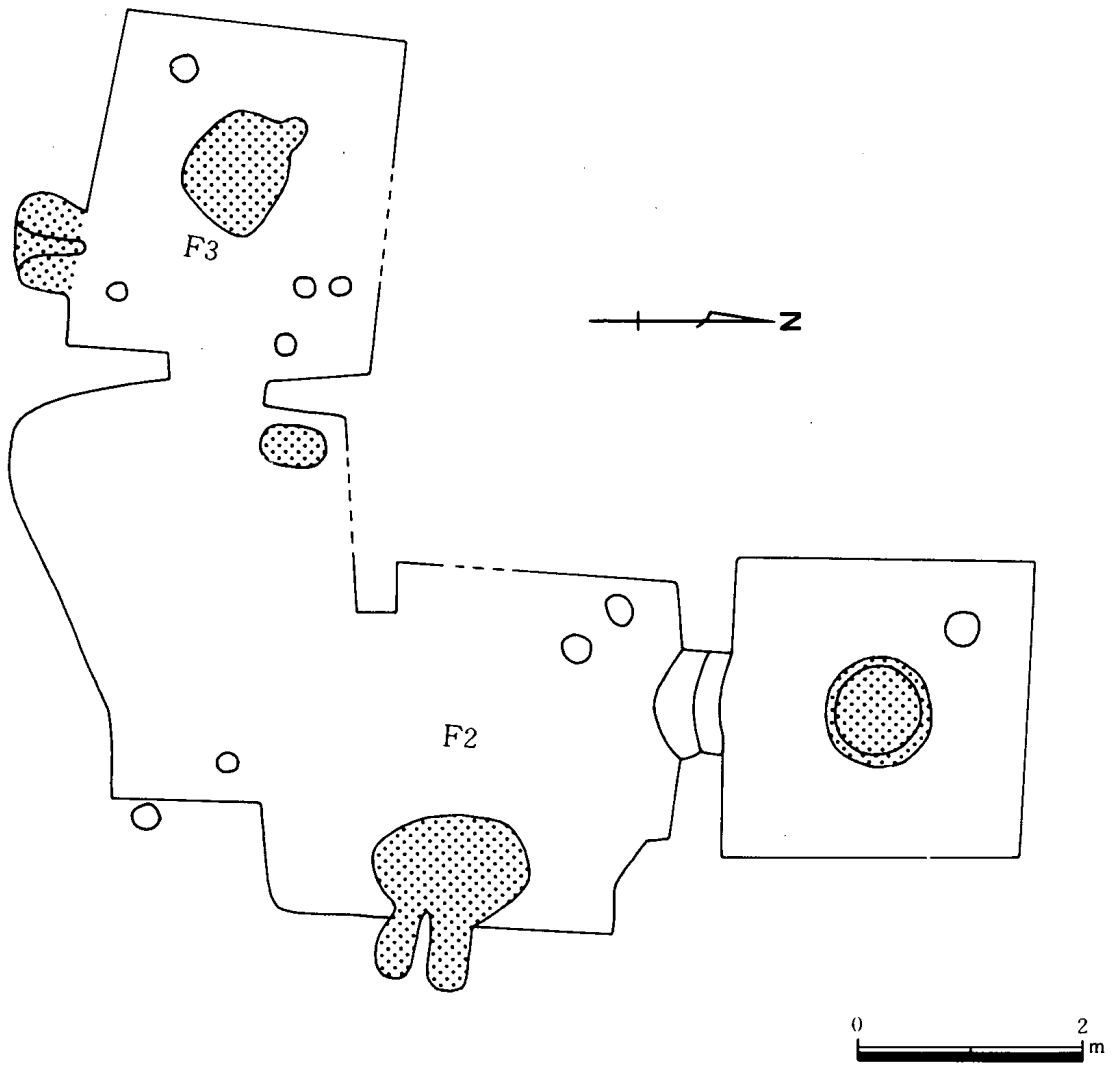


图11 双庵遗址 IV区 F2, F3平面图

僅かに東よりの南に向けて、規則正しく配置されている点である(図10)⁴⁹。土取り時に破壊され、部分的ではあるが、突出部の南側には道状の硬化面が認められたという。各々の住居跡の大きさはほぼ等しく、例えばF23、F27は、平均三・九×三・一メートルで、奥行きに対して幅が狭く、基本的には長方形を呈している。各々直径一メートル前後の円形の炉を伴い、また、白灰面が施されているものが多いようである。方形で、南壁中央に数十センチメートルの突出部を有する点では、大何庄遺跡のF7に類似しているが、炉の位置は北壁によっている。また、掘り込み内の柱穴の数は不統一で、大何庄遺跡F7のように、周辺にも柱穴を伴うような構造であるならば、掘り込み部分が近接しすぎていて、並存はほとんど不可能である。方形を基本とする住居跡の他に、円形プランの掘り込みを段状の通路で連結する、複室構造の住居跡も検出されている(F13)。

客省庄文化の中では、紅陶の占める割合が高く、齊家文化との密接な関係が推測されている双庵類型内においても、構造が異なる住居跡が共存するようである。趙家来遺跡で検出された一〇棟の住居跡の中には、康家遺跡のF23、F27に類似するプランを呈する例(F4)の他、土を盛り上げることににより、突出部を作り出している例がある⁵⁰。例えばF10では、西壁として、版築様の土盛りが部分的に残存している(図9)⁵¹。突出部が西側にある住居跡は、ほとんどがこのような構築方法であることが窺え、遺跡の立地条件と無関係ではなさそうである。すなわち、西側を南流する、漆水河に向かう緩斜面に立地しており、掘り込みは必然的に西側が浅くなるため、土盛りによって高くし、出入口部が作り出されたと考えられる。F10の断面図を見ると、基盤層に対する掘り込みが、東壁側は深く残っているのに対し、西側は居住面(白灰面)レベルがほぼそのまま続いている。このように地形に即した工夫がなされているが、基本的には、方形の居住部分と、幅が狭い突出部からなる住居跡である。また、双庵遺跡のI区F2は、二・八×二・六八メートルのほぼ正方形に近いプランを呈し、突出部は伴わないようである(図12)⁵²。中央部では、直径約九〇センチメートルの円形の炉が、また、炉と西壁の間に柱穴が一つ検出されている。他には、IV区で検出されたF2、F3

のように方形を基本とする複室構造のもの(図11)⁵³、さらにI区のF4やIII区のF1のように、円形で袋状を呈するもの(図13)⁵⁴がある。

常山遺跡では、側壁や出入口部の保存が良好な住居跡が検出されている(図14)⁵⁵。円形単室構造で、居住面に向かって傾斜し、北に開口する出入口部を伴う。居住面の直径は、三・三・二メートル、壁の高さは南側で二・二メートル、北側で一・九六メートルを測る。四つの円形の柱穴が、また、室部と出入口の境界部分で、室外からみて左側に、浅い落ち込みが検出されている。これまで取り上げてきた諸文化の住居跡では、居住面に円形の炉が設けられていたのが一般的であったが、本例では、出入口部から西へ約一メートルの壁面が、居住面から上へ約八〇センチメートルの範囲で紅色を呈しており、ここで炊飯行為がなされたことを反映していると推測されている。居住面は、火で焼いたため紅色、あるいは紅褐色を呈しており、白灰面は施されていない。出入口部は居住面に向かって傾斜しており、壁の高さを勘案した場合、屋根部分は地表面より少し高い程度であろうと推測でき、木材で屋根を組んだ後に、さらに土饅頭のように土で覆う構造が復元されている⁵⁶。従って、平面形だけではなく、壁体が地表面から立ち上がるように復元できる大何庄遺跡例とは、構造上本質的な差異があり、居住景観は全く異なったものになる。

住居に白灰面を施す技術は、馬家窯文化に系譜を求めるとはできないようであり、齊家文化の起源を論じる際に、注目すべき点の一つになる。王克林は、齊家文化が、中原地区、特に晋南龍山文化の影響を受けたと考える要素の一つとして、やはりこの白灰面を取り上げた⁵⁷。特に白灰面を作る技術を重視し、また、突出部を伴う隅丸方形のプランや規模の類似も指摘している。一方で、王克林が晋南龍山文化の例としてあげている、山西省夏県東下馮遺跡のF251では、上に柱を乗せたと考えられる扁平な石が四つ対称的に配置されていたと推測でき、また、中央には方形の炉が検出されている⁵⁸。このような事例は、報告に基づく限り、齊家文化では確認されていない。

以上見てきたように、各文化の住居跡には各々の特色が認められ、また、同一文化内においても画一的ではない。

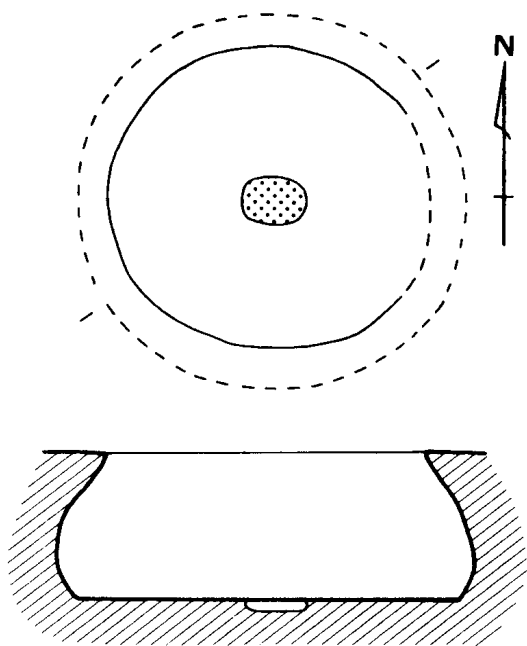


図13 III区 F 1 平面図・断面図
(スケールは図12と同じ)

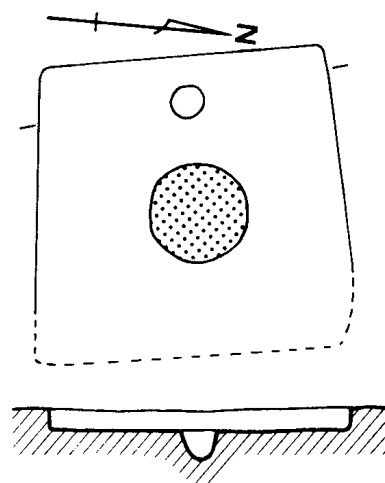


図12 I区 F 2 平面図・断面図



双庵遺跡

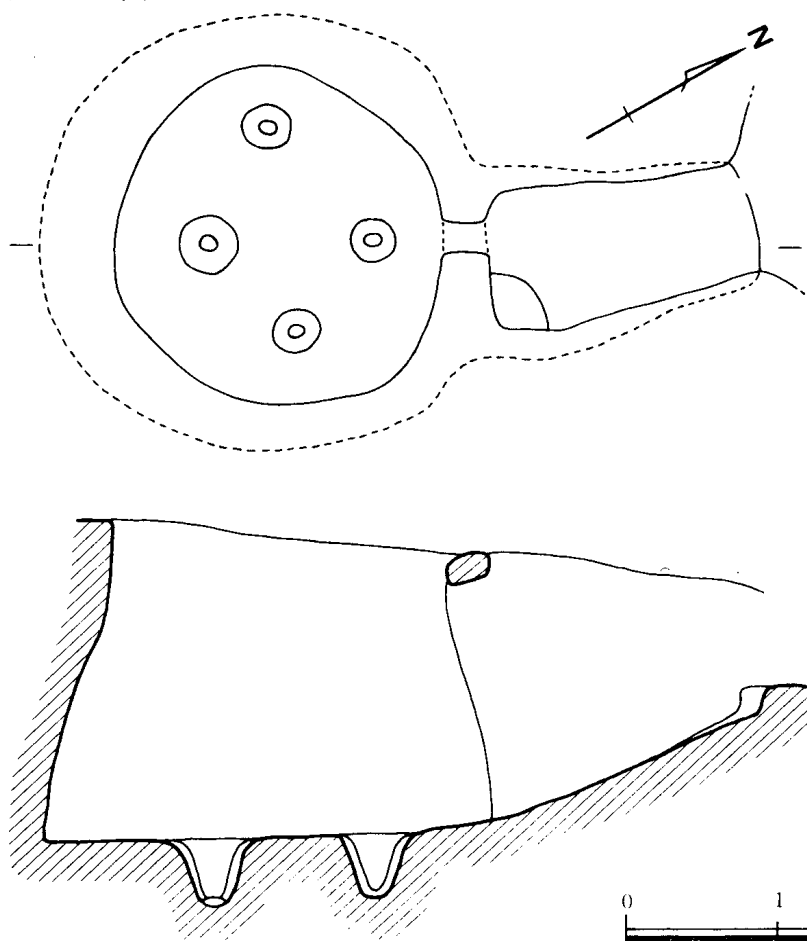
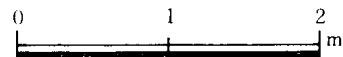


図14 常山遺跡 H14平面図・断面図



従って、白灰面の有無が、他の属性以上に共通点として目立つことになるが、各文化、各類型を構成する諸資料の、より緻密な体系化に根差しながら、異文化間、異類型間の比較を行っていく必要がある。

墓葬に関しても、同様のことが言える。齊家文化の墓葬は、木棺のような埋葬具をほとんど伴わない点、屈肢葬が単独ではほとんどみられない点、二次葬の占める割合が減少する点、頭位方向は西あるいは西北に非常に強い画一性が見られる点、副葬土器量が相対的に減少する点、豚の下顎骨の副葬が行われる点、等において馬家窯文化の墓葬と異なる。しかし、このような一般的傾向が、必ずしも認められない遺跡も存在する。例えば、分布域の西限に近い柳湾遺跡は代表的であり、他の遺跡では不明瞭な、馬家窯文化からの漸移的な変化を示していると同時に、齊家文化の地域色を表していると考えられる。

墓制を構成する要素の中には、全体に対する割合の増減、あるいは量の多寡、という数量的側面が強いものがある一方で、新出であることにより、より明確な差異として捉えうるものがある。例えば、頭位方向は馬家窯文化では東から南の間に納まっていたのが正反対になり、また、豚の下顎骨が副葬され始め、住居跡における白灰面と同様に、現段階では馬家窯文化と齊家文化を両断しているかのよう⁵⁹に映る。大何庄遺跡や秦魏家遺跡では、人頭大で扁平円形の石を、直径三〜四メートルの円形に配した遺構が検出されており、「石円圈」遺構と呼称されている。周辺からは、ト骨や、牛、羊の骨が出土しており、宗教行為に関連する遺構と考えられている。このような遺構が、どの程度普遍的であったのかは明確ではないが、馬家窯文化にはみられなかったものである。

客省庄文化の墓葬資料は、住居跡に比べると少なく、また、明らかにされた集団墓地の規模も大きくなく、数基から十数基の報告が多い。双庵遺跡で検出された一三基⁶⁰のうち、仰身直肢の姿勢をとる例は七例で最も多く、他に側身屈肢、俯身、さらにうずくまった姿勢などが見られる。頭位方向は、東一、東南二、南三、西南一、西三、西北二、不明一、となっており、埋葬姿勢と同様に画一的とは言えない。副葬品を伴うのは三基だけで、例えば、二八号墓は、

双耳罐が一点、覆土中から骨鏃が一点、と量も少ない。鳳翔県大辛村遺跡は、双庵類型に属し、ここでは三基の墓葬が報告されている。⁽⁶¹⁾ そのうち人骨が残存していた二基（三号・八号墓）は、共に仰身直肢葬で、頭位方向は南西→西である。三号墓では、被葬者の足元に三点の土器と、一〇点の豚の下顎骨が副葬されていた。康家遺跡で検出された一六号墓は、西北頭位の俯身葬、一七号墓は東に頭を向け、面方向が南の側身屈肢葬で、前者で土器片が出土した他は、共に副葬品はない。⁽⁶²⁾ また、一号墓は、南頭位の仰身直肢葬で、やはり副葬品と認めうるものは出土していない。⁽⁶³⁾ 常山遺跡では、二基の墓葬が報告されている。⁽⁶⁴⁾ 共に仰身葬で、頭位方向は西北である。一号墓には二点の土器が、二号墓には石礫が盆に入れられた状態で副葬されていた。

王克林は、住居跡の白灰面の他に、墓葬習俗の類似からも、齐家文化が晋南龍山文化の影響を受けて発展したと主張している。⁽⁶⁵⁾ 山西省襄汾陶寺遺跡で、墓坑内や人骨に朱が撒かれていたこと、また、豚の下顎骨が墓葬に関連するよう埋納されていた状況が、墓葬習俗として、齐家文化の遺跡にもみられることに基づいている。そして、豚の下顎骨の量的較差が、陶寺遺跡よりも齐家文化の諸遺跡の方が大きいことを、私有制の発生から発展への方向を示していると説明している。このような王克林の解釈は、今後、さらに多くの手続きを経て検証されなければならない。分布域が重複、ないしは隣接しない文化間の関係を考古学的に論じるには、各々の文化の枠組みを形作り、可能な限り地域色を明らかにしておく必要がある。そして、地域的にみて両文化の間で展開した客省庄文化が、どのような関わりを持ったのか、という点にも留意しなければならない。その点で、甘肅省東部の齐家文化、陝西省西部の客省庄文化（双庵類型）の全体像の把握と、比較検討が十分に行われているとは言い難い。ともあれ、該地域においては、分析可能な資料に制約があることは否めない。

そこで次章では、文化を構成する一要素である集団墓地からの見通しを得るために、集団墓地分析の方法の体系化を念頭において、甘肅省西部域の四遺跡を対象とした遺跡内分析を試みることにする。集団墓地は、時期や地域を異

にして、特定の要素（例えば頭位方向、埋葬姿勢など）の集合体という観点から捉えることができ、同一文化の各遺跡において、あるいは文化の枠をこえて比較検討することが可能である。そのためには、大きく捉えることができる。各々の文化の生成変化との対応を勘案しつつ、各集団墓地の特性を社会の特性として読み取る際の要件を、明確にしていく手続きを意識的に行うことが必要であると考えている。この点に留意して、齊家文化の集団墓地の具体的分析を試みたい。

（未完）

註

- (1) 松崎寿和 一九七二「八 中国新石器文化の四系列 5 甘肅彩陶の三文化期」『中国の先史時代』考古学選書六「雄山閣」一四一—一五五頁
- 横田禎昭 一九八三「甘肅・青海における先史文化の編年」『中国古代の東西文化交流』考古学選書二一「雄山閣」一一九—一五三頁
- (2) J. G. Andersson 一九二五 Preliminary Report on Archaeological Research in Kansu 地質彙報甲・五 中国地質調査所
- 松崎 哲訳「甘肅考古記」（松崎寿和編 一九八五『黄河・シルクロードの考古学』「雄山閣」所収 一八四—二一四頁）による。
- (3) 例えば、
劉耀 一九四七「龍山文化与仰韶文化之分析」『中国考古学報』二二 二五—二八二頁
- (4) 夏鼐 一九四八「齊家期墓葬的新發現及其年代的改訂」『中国考古学報』三三 一〇—一一七頁
- (5) 例えば、胡謙盈は、柳湾遺跡馬廠期の放射性炭素による年代測定の新しい値（紀元前二〇五五±一〇年）が、大何庄遺

跡で得られた値に近く、かつ、柳湾遺跡の齐家文化より約一〇〇年古いことを根拠の一つとして、東部域で展開した甲型の方が、西部域の乙型よりも先行するとしている（一九八〇「試論齐家文化的不同類型及其源流」『考古与文物』一九八〇—三 七七—八二、三三頁）。

尚、図二は、左記の文献に地域別に掲載されている、年輪年代法による校正数値（半減期五五七〇年）のいくつかを集めたもので、直線部分は誤差範囲を示している。

中国社会科学院考古研究所 一九八三『中国考古学中碳十四年代数据集 一九六五—一九八一』〔文物出版社〕

(6) 甘肅省博物館（張学正） 一九六〇「甘肅古文化遺存」『考古学報』一九六〇—二 一一—五二頁

※（）内は、文末に記されている執筆者名である。以下同。

(7) 図1は、註(6)文献の図一に基づいて作製した。但し、次の諸文献に基づいて、甘肅省内では常山遺跡と白龍江流域の遺跡を、また、青海省、寧夏回族自治区、陝西省内では、齐家文化として報告されている遺跡を加えてある。

①中国社会科学院考古研究所涇渭工作队 一九八一「隴東鎮原常山遺址発掘簡報」『考古』一九八一—三 二〇—二二頁

②長江流域規劃辦公室考古隊甘肅分隊 一九七八「白龍江流域考古調査簡報」『文物資料叢刊』二 二六—三七頁

③青海省文物管理处考古隊（許新国） 一九七九「青海省文物考古工作三十年」『文物考古工作三十年』〔文物出版社〕一六〇—一六八頁

④青海省文物考古隊 一九八六「青海互助土族自治县綫寨馬廠、齐家、辛店文化墓葬」『考古』一九八六—四 三〇—六一—三二頁

⑤鍾侃・張心智 一九六四「寧夏西吉县興隆鎮的齐家文化遺址」『考古』一九六四—五 一一—二二、二二—三三、二四—四頁

⑥寧夏回族自治区博物館考古組（鍾侃） 一九七九「寧夏三十年文物考古工作概況」『文物考古工作三十年』〔文物出版社〕

一五四—一五九頁

⑦寧夏文物考古研究所(鍾侃) 一九八七「寧夏固原店河齐家文化墓葬清理簡報」『考古』一九八七—八 六七三—六七七頁

(8) 註(七) ②文献

(9) 張忠培は、客省庄遺跡の「文化三」が西周時期の文化遺存であり、また「文化一」には廟底溝類型という名称が付されているので、「第二期」をとる呼称法を提唱している(一九八〇「客省庄文化及其相關諸問題」『考古与文物』一九八〇—四 七八—八四、九〇頁)。

(10) ①任步雲 一九五八「甘肅秦安県新石器時代居住遺址」『考古通訊』一九五八—五 六一—二頁

②甘肅省博物館(魏懷珩) 一九七八「武威皇娘娘台遺址第四次発掘」『考古学報』一九七八—四 四二—四四八頁

③中国科学院考古研究所甘肅工作隊 一九七四「甘肅永靖大何庄遺址発掘報告」『考古学報』一九七四—二 二九—六二頁

④中国社会科学院考古研究所甘肅工作隊 一九八〇「甘肅永靖張家咀与姬家川遺址的発掘」『考古学報』一九八〇—二 一八七—二二〇頁

(11) 掘削した後、「すき混じりの土」(草泥土)を塗って焼いたり、突き固めたりしてから、漆喰を塗布している。寺田良喜氏は、「草拌泥」を「すき混じりの土」と訳しており、「草泥土」も同様のものであろうと思われる。

寺田良喜 訳 一九八八「第二章 新石器時代 一 黄河流域の新石器時代文化」(三)黄河流域の龍山文化』『新中国の考古学』(関野 雄監訳)「平凡社」六四—八一頁の七八頁による(原典…楊錫璋 一九八四「第二章 新石器時代 一 黄河流域の新石器時代文化」(三)黄河中游的龍山文化』『新中国的考古発現和研究』[文物出版社]六八—八五頁の八三頁)。

(12) 皇娘娘台遺跡(六三号墓)では羊の頭骨が、また大何庄遺跡(一四号・二七号墓)では、羊の下顎骨が副葬されている例

もある(註(10)②、③文献)。

- (13) ①石陶 一九六一「黄河上游的父亲氏族社会——齐家文化社会経済形態的探索」『考古』一九六一——三——一頁
 ②吳汝祚 一九六一「甘青地区原始文化的概貌及其相互關係」『考古』一九六一——二——一九頁
 牧畜業が農業よりも重要な生活基盤であったとする石陶の見解に対し、一丁は、豚を中心とする牧畜業は農業の発展の上に成立するものであるとし、副次的なものとして位置づけた。
- ③一丁 一九六一「關於齐家文化主要經濟形態的探討」『考古』一九六一——七——三八八、三八九頁
- (14) 黄河水庫考古隊甘肅分隊(鄭及武・謝端琚) 一九六〇「臨夏大何庄、秦魏家兩處齐家文化遺址發掘簡報」『考古』一九六〇——三——九——一二頁
- (15) 甘肅省博物館(郭德勇) 一九六〇「甘肅武威皇娘娘台遺址發掘報告」『考古學報』一九六〇——二——五三——七一頁
- (16) 註(10)②、③文献
- (17) 中国科学院考古研究所甘肅工作隊 一九七五「甘肅永靖秦魏家齐家文化墓地」『考古學報』一九七五——二——五七——九六頁
 青海省文物管理處考古隊 中国社会科学院考古研究所 一九八四「青海柳湾——柴都柳湾原始社会墓地」(上・下)『文物出版社』
- (18) 甘肅省博物館 一九七九「甘肅省文物考古工作三十年」『文物考古工作三十年』[文物出版社]一三九——一五三頁
- (19) 註(7)③文献
- (20) 註(7)⑥文献
- (21) ①謝端琚 一九七九「試論齐家文化与陝西龍山文化的關係」『文物』一九七九——一〇——六〇——六九頁
 ②—— 一九八〇「論大何庄与秦魏家齐家文化的分期」『考古』一九八〇——三——二四八——二五四頁
 ③—— 一九八一「試論齐家文化」『考古与文物』一九八一——三——七六——八三、五三頁

- ④ — 一九八四「第二章 新石器時代 — 黃河流域的新石器時代文化 (七) 黃河上游的齊家文化」『新中国的考古發現和研究』「文物出版社」一一八一—一二五頁
- ⑤ — 一九八六「略論齊家文化墓葬」『考古』一九八六一—一四七一—一六一頁
- (22) 註 (21) ① 文献
- (23) 註 (21) ② 文献
- (24) 端居 一九七六「齊家文化是馬家窯文化的繼續和發展」『考古』一九七六一—六 三五二—三五五頁
- (25) 註 (21) ① 文献
- (26) 中国社会科学院考古研究所武功發掘隊(梁星彭)一九八三、一九八一—一九八二年陝西武功縣趙家來遺址發掘的主要收穫「考古」一九八三—一七 五八四—五八七頁 五八七頁の図四の一部をトレースして作製した。
- 各々の器種名は、1. が敞口円腹罐、2. が加砂双耳罐、3. が短頸折肩罐、4. が单把繩文鬲、5. が罐形单把鬲、6. が罍となっている。遺跡間の比較を行う際に、器種名の統一を図っておくことが、形式内容と型式変化を明瞭にするためには必要である。特に3. の器形は、他に、喇叭口折肩罐、罐、瓮、壺などとして扱われている。また、廟底溝II期文化に見られる、肩がなだらかで口頸部が喇叭状に開く丈高の壺形土器は、これらの祖形に当たると考えられ、喇叭口円肩罐、侈口長頸罐などと呼ばれている。
- (27) 吳汝祚 一九八三「齊家文化墓葬初步剖析」『史前研究』一九八三—一 五八一—六九頁
- (28) 註 (21) ② 文献
- (29) 頭骨や四肢骨の一部を欠いていたり、頭部と胴部が分離している例、また煩悶したかのような姿勢をとる例は、戦争や奴隷の存在を示唆する証拠として扱われることが多い。
- (30) 張忠培 一九八七「齊家文化研究(上)」『考古学報』一九八七一—一 一一—一八頁

「齊家文化研究(下)」『考古學報』一九八七—一九八八—一五三—一七六頁

(31) 陳遲 一九八八「關於齊家文化研究中的幾個問題」『考古』一九八八—六 五二八—五三七頁

「大何庄遺址“分段”研究商榷——與張忠培同志討論」『考古』一九八八—六 五三八—五四一、
五三七頁

(32) 註(7) ⑦文献

(33) 1. は註(7) ⑦文献の図六を、2. は図五—3、3. は図五—2、4. は図五—5、5. は図五—7をトレースした。
二号墓からは、全部で九点の土器が出土している。

また、一号墓と二号墓はほぼ同時期と考えてよいと思われ、一号墓から出土した4. の壺形土器(Ⅲ式罐)と、註(26)
でふれた廟底溝Ⅱ期文化の、所謂喇叭狀口縁の円肩罐、折肩罐との関係は興味深い。

(34) 註(7) ⑥文献

(35) 註(5) 文献

(36) 註(7) ①文献

(37) 陳昱・洪方 一九八二「隴東鎮原常山下層遺存浅析」『考古』一九八二—四 三九二—三九七、四〇六頁

(38) ①蘇秉琦・吳汝祚 一九五六「西安附近古文化遺存的類型和分布」『考古通訊』一九五六—二 三二—三八頁

②考古研究所灃西發掘隊(王伯洪・鍾少林・張長壽) 一九五九「一九五五—五七年陝西長安灃西發掘簡報」『考古』一
九五九—一〇 五一六—五三〇頁

(39) 註(9) 文献 八〇頁

(40) 籍和平は、客省庄二期遺存、双庵遺存、石峁遺存に三分し、また、鞏啓明は、康家類型、双庵類型、石峁類型に分け、さ
らに漢水や丹江流域に見られる龍山文化遺存を紹介している。

- ① 籍和平 一九八六「從双庵遺址的發掘看陝西龍山文化的有關問題」『史前研究』一九八六—一九〇—九七頁
- ② 鞏啓明 一九八八「陝西新石器時代考古工作与研究」『考古与文物』一九八八—五・六 四一—五九頁
- 図5は、②文献の記述に基づいて作製した。
- (41) 王克林 一九八三「試論齊家文化与晋南龍山文化的關係—兼論先周文化的淵源」『史前研究』一九八三—二七〇—八〇頁
- (42) 図6は、註(10)③文献三六頁の図八をトレースした(一部改変)。ドットの部分は、炉を表しており、他の住居跡実測図も同様である。
- (43) 図7は、註(10)③文献三四頁の図六をトレースした(一部改変)。
- (44) 但し、第二層のF4はプランが正方形に近く、規模も大きい。またF8は、遺構配置図(図三、図四)の中に見い出すことはできず、形状、他の住居跡との位置関係は不明である。
- (45) 倉林眞砂斗 一九八九「集團墓分析論I—中国新石器時代馬家窯文化(半山・馬廠期)を例として(二)」『金沢大学文学部論集 史学科篇』九 一—五八頁
- (46) 図8は、鄭洪春・穆海亭 一九八八「陝西長安花樓子客省庄一期文化遺址發掘」『考古与文物』一九八八—五・六(二二—九—二三九頁)二三〇頁の図二をトレースした(一部改変)。
- (47) 註(38)②文献五一八頁 図二を参照のこと。内室が円形、外室が方形を呈する例もみられる。
- (48) 陝西省考古研究所康家考古隊 一九八八「陝西臨潼康家遺址發掘簡報」『考古与文物』一九八八—五・六 二二四—二二八頁
- (49) 図10は、西安半坡博物館(魏世剛)一九八三「陝西臨潼康家遺址第一、二次試掘簡報」『史前研究』一九八三—二五六—二六七頁)五八頁の図五をトレースした(一部改変)。

- (50) この他に、建造物の基礎になったと考えられる、版築による土塀状の遺構や、家畜飼育所ではないかと推定されている柵囲いの跡が検出された。
- 中国社会科学院考古研究所 一九八八『武功発掘報告—澠西庄与趙家来遺址』[文物出版社]
- (51) 図9は、註(50)文献一〇九頁の図八七をトレースした(一部改変)。
- (52) 図12は、西安半坡博物館(籍和平・李全英)一九八三「陝西岐山双庵新石器時代遺址」『考古学集刊』三(五一—六八頁)五三頁の図四をトレースした(一部改変)。
- (53) 図11は、註(52)文献五三頁の図五をトレースした(一部改変)。
- (54) 図13は、註(52)文献五四頁の図六一二をトレースした(一部改変)。
- (55) 図14は、註(7)①文献二〇三頁の図四をトレースした(一部改変)。
- (56) 張孝光 一九八三「隴東鎮原常山遺址一四号房子的復原」『考古』一九八三—五(四七四—四七七頁)四七五頁の図三を参照のこと。
- (57) 註(41)文献
- (58) 註(41)文献七一頁の図一一を参照のこと。
- (59) この他に、銅器、ト骨などをあげることができる。ト骨は、主に羊の肩胛骨が用いられ、灼くだけで、穿孔はされていないようである。
- (60) 註(52)文献の五五頁を参照のこと。
- (61) 雍城考古隊(呂智榮・曹明檀)一九八五「陝西鳳翔県大辛村遺址発掘簡報」『考古与文物』一九八五—一(一一—二二頁)二、三頁を参照のこと。
- (62) 註(49)文献の六〇頁を参照のこと。

(63) 註(48) 文献の二一八頁を参照のこと。

(64) 註(7) 文献①の二〇七頁を参照のこと。

(65) 註(41) 文献

※校正段階で、寧夏文物考古研究所(許成・李進増)一九八九「寧夏海原県菜园村遺址切刀把墓地」『考古学報』一九八九―四(四一五―四四八頁)に接した。主として藍文が施された、多量の灰陶、灰褐陶、紅褐陶などに、馬家窯文化半山期から馬廠期の彩陶が、副葬土器として混在している状況が明らかにされている。店河例と同様に、該地域の実態を明らかにしていく上で、重要な手掛りとなる資料である。